

[連載 6回]

TEXT●中三川大地 (Daichi Nakamigawa)

PHOTO●田中秀宣 (Hidenobu Tanaka)

バ イタリテイ溢れる男だ。あの  
 事故の後、復帰してレース  
 に出場するために、市販車のアルフ  
 アロメオを改造してレーシングカー  
 に仕上げていたことは知っていた。  
 チューニングパーツを選ぶ時、既製  
 品では満足せず、自らが開発に携わ  
 ってオリジナルを開発し、理想の状  
 態に近づけようとしていたことも。

復帰から約10年経った。手探り  
 で進めていたレースが軌道に乗った  
 後は、オヤジレーサーやドライビ  
 ングスクールなど、アマチュアモト  
 タースポーツの発展を願い、レース  
 やサーキット走行などを普及させる  
 活動に尽力してきた。そうした活動  
 とは切っても切り離せないのが「TEZZO」というブランドである。

TEZZOは太田哲也が自らの考  
 え方を落とし込むアフターパーツブ  
 ランドだ。欧州人が親しみを込めて  
 呼ぶ、哲也の「TEZZ (テッツ)」、  
 というあだ名を元に、頭文字の「O」、  
 あるいは無限大の可能性を持つ意味  
 を秘めた「0 (ゼロ)」を末尾に付け  
 た造語である。その傍に表記された  
 ブランドのコンセプトは、KEEP  
 CHALLENGING FOR  
 LIFE。自らのマシンを走らせるた  
 めに始めたパーツ開発が、なぜこう



## 挑戦を続けるブランド。

太田哲也が主宰する自動車のカスタムパーツブランドが「TEZZO」である。アルファロメオから始まり、瞬く間にイタリア車を中心に車種が拡大した。拠点となるTEZZO BASEが誕生したいま、活動はより幅広さを増している。今回はこのTEZZOを取り上げ、太田哲也のモノ作りの考え方を捉える。そして同時に、彼の描く夢「KEEP CHALLENGING FOR LIFE」の本質に迫る。

した理念を持つブランドへと成長したのだろうか。

「事故の後、新しい職業を探していたとき自分は社会のどこに当てはまるだろう、輝くのだろう——ってずっと考えていた。自動車評論を中心とするジャーナリスト活動もそのひとつ。同時に、俺は昔からクルマをセッティングするのが得意だったから、それを活かせたらと思ったんだ。いま思えば現役時代から、世界を見渡せば俺より速い奴はいくらでもいたけど、クルマの特性をいち早く察知して、改善点を見出し、それを適切な言葉にしてエンジニアに伝える……その能力は誰にも負けなかった」

太田は現役時代から開発能力の高さに定評があった。彼がフェラーリF40やF355で挑んだ全日本GT選手権、フェラーリとはいえ市販車をイチから造り込み、メーカービルドの純レーシングカーであるボルシエと対等に闘う——ドライビング技術はもちろん、優れた車両開発能力がなければ、とうてい成し得なかったことだろう。いま思えばマツダのワークスでグループCカーを走らせていた時代から、車両開発の重要性に気づいていたのかもしれない。

そこに、自身が30歳の頃より続けていたインプレッション等の自動車評論で感じた気持ちが変わった。

「クルマに乗って、ここが悪い」と言うのは簡単だ。だけど、エンジニアの話の聞けば聞くほど、実際に造るのは大変なんだと分かる。自動車メーカーは多かれ少なかれ、万人を意識した商品を開発する必要がある。特に昨今はコスト意識でがんにがらめにされ、環境対応性能もまた大きな壁となっている。最初の段階では

アルファロメオ用のチューニングパーツを皮切りに、自身が認めたモデルへのリプレイメントアイテムを積極的に開発。ブランド名の「TEZZO」は、太田哲也氏の頭文字&ニックネームと、無類大をも表現したネーミング。



エンジニアの理想を追求した、俺たちにとって魅力的なモデルであつても、それが最終的に発売される頃になると、多くが大人しくなり、あるいは安っぽくなつてしまふ」

そこで、太田が持つ車両開発能力を活かして、牙を抜かれた世の自動車よりエモーションナルにする製品を展開しようと思ひ立つ。性能向上はもちろんだが、何もかもを純レーシングカーにしようというわけでは

ない。デザインが美しかったり、音やエンジンフィーリングに興奮できたり、手に取つたり眺めただけで美しさの伝わる工芸品のようなものをクルマに与えようと考えた。

それは具体的にどういふものなのだろう。そんな問いかけに対し、太田は「俺はフェラーリを造りたい」と、開口一番、そう言った。

「例えばカローラってさ、乗ると何の不満もないわけ。静かで快適だし、燃費はいいし、年配者が街で乗るぶんには動力性能にも不満はない。対してフェラーリって音はうるさいし運転は難しく、助手席なんかある意味不快だよ。カローラなら許してもらえないような要素が詰まってる。だけどそういうネガティブな要素を含めてフェラーリならではの魅力がある。運転の楽しさはもちろん、部品ひとつ取つても惚れ惚れするほ

ど美しくそれが人間を鼓舞する気がするんだ。カローラだつていつ守りに入つてしまふそうだけど、フェラーリなら常にクルマから刺激を受けて自分自身が新陳代謝できる。フェラーリというクルマは、KEEP CALM AND HALLENGING FOR LIFE、を買けるパートナーなんだ。俺はそういう要素をフェラーリ以外のクルマにも与えたいと思ふ」

クルマはパートナーだ。互いに刺激を与えあふことによつて人生に彩りを添えられる。それを具現するのがTEZZOなのだという。

といても、製品開発ともなれば膨大な時間と労力、そしてコストがかかる。まして太田が思い描く製品は、そのどれもがコダワりに満ちたもの。安直にライ

ンアップを増やすことはしない。ブレーキやサスペンションは、どのモデルも五感を駆使してテストが行われる。自分が納得ゆくクオリティに到達していないと判断すれば、途中で開発を断念することも少なくない。

最初は執筆活動のため、東京に事務所があつた太田にとつて、それは決して平坦な道ではなかつた。

「アルファロメオのパーツは自分が乗つていたこともあつて昔から造つ



ていた。ところが当時は、雑誌を見て興味を持ってくれた人に製品を見せる場がない。だからまずは横浜に小さなショールームをオープンさせた。すると今度は、部品やクルマをストックする場所や取り付ける工場が必要になってきた。もっと広い場所が欲しいと思つていた矢先に、リーマンショックが起こつたんだ」

2008年に起きたこの経済恐慌によつて、自動車業界は急速に萎む方向へ向かつた、と一般的には思われている。だが、太田はこれをネガティブに捉えず糧にした。

「自動車業界はこれから大変な時期を迎えるだろう、とは思つた。だからこそ、敢えてチャレンジしたほうがいい。いま思えばリーマンショックの影響で空いた広い敷地を借りられたし、量産を委託する部品に対しても、サプライヤーが小ロットから受け付けてもらえるようになった。もし、時代が好景気ならこうはいかない。門前払いだったかもね」

## 吟味を重ねた「TEZZO」の数々

オリジナル展開しているアイテムは多岐にわたるが、中でも人気はマフラーやブレーキシステム、そして足まわり。いずれも太田哲也氏の開発力が存分に発揮され、妥協のないテストを繰り返した後製品化されている。他にもコンプリートカーやエアロパーツなどの大物から、アパレルなどの小物まで網羅する。



こうして2010年にオープンしたのがTEZZO BASEである。TEZZOのデモカーを飾れる広いショールームに、ゆとりある駐車場も備える。敷地内にサービスマンホールも建てた。ブランドにとつての、ひとつの「城」が完成したのだ。

TEZZO BASEは、ユーザーから生の声が届いてそこからトレンドを掴んだり、太田自身が思つていた以上の成果を上げていく。いまではブランドのアイテムも増えた。最初は勝手知つたるアルファロメオから始まつたが、太田自身が興味を持ち可能性を見出したメイクスなら積極的に開発へ乗り出す方針だ。アルファロメオ以外のイタリア車だけでなく、ルノーやVW、トヨタ86/スバルBRZも手がけ始めている。

そうした道を歩む太田に、TEZZOとしての今後の展望を聞いた。

「エンツォ・フェラーリは52歳からクルマを造り始めたんだ。だから俺も遅すぎることはないんじゃないかな。スタッフやサプライヤーたちの「チーム」は、いつか自分たちで、オリジナルのクルマを造りたい。つていう夢を共有している。まずはTEZZOのコンプリートカーを、ゆく



## ディーノの復活も間近?

埼玉県のラン・アンド・ランにてレストア作業を進めていたディーノ246GTが、外装の修復を終えてTEZZO BASEに運び込まれた。エンジンや足まわり、その他細部に至るレストアを施せば、いよいよ希望の復活である。今後も作業の成り行きを見守り報告していきたい。

ゆくはオリジナルカーを造つて販売したいと思つている。実現できるかできないかは誰にも分からないけど、夢に向かつて動き出していくときにこそ生きていくという充足感を感じる。それこそ、KEEP CHALLENGING FOR LIFE、なんだ。俺は、いつも夢を追い続けていたい」

自らのブランドへの想いを熱く語る太田には、夢を実現させようという勢いを感じる。KEEP CHALLENGING FOR LIFE、こそ、彼のライフワークだ。



## 夢の発信地「TEZZO BASE」とは?

TEZZOのアイテム群に、実際に触れることができる場所として設立された、まさに太田哲也氏の「夢」が具現化し発信される場所。ショールームとしての役割はもちろん、併設されたファクトリーにおけるサービスの提供、パーツ開発、そして太田哲也氏に共感するユーザーの憩いの場としても機能する。住所：神奈川県横浜市都筑区荏田東2-9-1